

平成26年度西宮文学案内
春講座 第1回「ラ・パボーニ」を訪れた作家たち

日時：2014年5月17日（土）14時から

場所：西宮市立夙川公民館 講堂

講師：蓮沼 純一（西宮芦屋研究所員）

河内

ロビーで「懐かしい」といった声が飛び交っていましたが、是非やってみたかった素材の一つが、このラ・パボーニです。私も何十回と行きましたけれども、後ほど27年前の私の映像が流れるそうです。NHKの「きんき紀行」という番組で夙川界隈を紹介した時のもので、その時は大石邦子さんもお元気でしたし、いろいろと懐かしい映像が出てくるはずですよ。

年6回、このシリーズで企画を立てておりますが、できるだけいろんな会場でやりたいのです。旧甲子園ホテルとか、普段行きたくても行けていないような、夙川カトリック教会の地下ですとか。この片鉾池は、明治時代には日本で最初のウォーターシュートのある遊園地があったところで、昭和のはじめには「キネマ旬報」という有名な映画誌の編集部が置かれた時代もあり、女優の岡田茉莉子さんのお父さんの岡田時彦という俳優がこのあたりで亡くなっています。それから、中村憲吉という歌人の住んだ家があったり、川沿いに南へ行くと画家の須田剋太さんのアトリエがあったりと、いろんなものがありました。今回は、ラ・パボーニを選びました。小松左京さんや野坂昭如が若き日に行かれた店です。今日は小松左京先生のご家族の方が会場にいらっしゃるのですけれども、西宮の思い出を掘り起こす運動を来年以降もずっと続けていきたいと思っています。よろしく願い致します。

それではラ・パボーニの懐かしい映像、お話をお楽しみ下さい。

蓮沼さん、よろしく願い致します。

蓮沼

ただいま紹介にあずかりました蓮沼です。しばらく西宮を離れておりましたが、3年ほど前に、帰ってまいりました。興味あること、感じたことをブログに綴り、その中で、夙川のパボーニについて書いておりましたところ、西宮芦屋研究所の小西さんから講演をしてみないかとお誘いを受け、こういう機会を得ることができました。

今日はほとんどブログに書いたことの紹介なので、読まれた方はまた同じこと言ってるな、と思われるかもしれませんが、是非この1時間半、お聞きください。

まず最初に、夙川パボーニの古い映像が残っており、そこに色々、面白いというか懐かしい場面がでてまいりますので、そのビデオからご覧ください。

<約20分間の映像>

蓮沼

これで映像は終了なのですが、いかがでしたでしょうか。昔の夙川の風景がよく映っていて、懐かしい番組だったと思います。

途中でロミ山田さんが出ていました。私は彼女が夙川出身だとは知らなかったのですが、「誰かに行きたいとおきのお店」という本を書かれており、そこで、日本で一番おいしいクッキーはクッキーローゼだと紹介されています。これは夙川の駅を少し北側に上ったところのミッシェルバッハというお店で作られているクッキーなのです。私もそれを読んで、一度食べてみたいと行ってみますと、予約なしでは買えない、半月は待たないと買えないということで半月待って買いましたが、時間が掛かる丁寧な作り方をされており、やはりおいしいクッキーでした。

それでは、ビデオでほとんど興味ある話題が済んでしまったかもしれませんが、本論に入らせていただきます。

まずパボーニの歴史です。店を一番最初に開いたのは、小森譲さんという尼崎出身のバリトン歌手です。その方がイタリアに声楽の勉強に行かれたときに、パボーニというエスプレッソマシンのメーカーがイタリアの町の中に喫茶店を開いていました。小森さんは日本に帰ってきて、イタリアで通っていたその店が懐かしくて、自分で喫茶店を昭和3年に堂島仲町に開き、「カーサ・ラ・パボーニ」と名付けたのです。

かなり忙しい人だったらしく、浅草でオペラを演じたりして、本業が多忙になり、面倒を見きれないということで、義兄の中村善太郎さんにその店を譲ることになりました。

中村さんは場所を変えて、高麗橋筋の南側に、こういう「ラ・パボーニ」というお店、昭和3年、昭和5年の写真なのですが、今見てもセンスの良いハイカラなお店を始められました。

中村さんの血縁の大石邦子さんが手伝っていたところ、そこへ大石輝一さんも通ってこられて、交際が始まり結婚されるのです。そのあと中村善太郎さんも高麗橋筋のパボーニを閉めることになって、夙川に大石夫妻が喫茶店を開店することになります。それが夙川の千歳町のパボーニだったのです。

今日来られた方々の中にはパボーニを訪ねたことがある方も大勢おられると思います。私は小学校に入るくらいまで、すぐ近くに住んでいたのですが、残念ながら、幼すぎたので、お店の中に入ったことはありません。しかし多くの方々がどのような雰囲気の喫茶店であったかエッセイなどに述べられています。

大石さんは苦楽園口の石芻町に自分の家を構えておられて、かなり広い家だったので、離れを作っておられ、そこに小さい時から成人されるまで住んでおられた田植 ines さんという方が、KOBE 喫茶探偵団報告書『別冊 SANPO』にお店の様子を書いています。

“夙川駅前の川にかかる橋を渡り少し南を左に折れ、坂道をおりた辺りの海側。背の高い棕櫚の木のアプローチから、いかにもパリっぽい黒いレース布を配したガラスドアも細や

かなセンス。天井の高い店内にはたしかプロペラ扇風機がまわっていた。フランスよりフランスらしいかもしれない、南仏あるいはパリ下町流のカフェ。”

こういう風に表現されています。内装についても描かれているのですが、非常にパリっばい雰囲気、センスの良い喫茶店だったようです。これは全て大石さんが自ら作られたということです。

大石さんは建築家じゃないのですが、大石さんが作った建物は、建築を専門にされる方も、芸術作品として賞賛されています。毛綱モン太という建築家、この方は釧路の美術館を建てられたり、非常に先鋭的なデザインをする建築家として有名な方です。多摩美大の建築科の教授をされていましたが、残念ながら56歳で若くして亡くなりました。その方が雑誌『建築』に、「奇館異感」という表題で連載され、その第一回目で取り上げられたのが、ラ・パボーニなのです。

“一見2階建て、よく観察すると3階、実は4階なり。突然変異にて、日本にメキシコ住宅現われた感の立面なり。”

パボーニ自体はイタリアのものなのですが、大石さんはフランスのカフェを意識していたように思います。しかし毛綱モン太は、メキシコの住宅を意識していると捉えており、そう言われればそうかなという気もします。

専門家ですから、図面を付けて建築の雑誌に掲載されています。1階に喫茶店があり、その横に急な階段を作って、そこにピンクの間という部屋を作っています。その上がアトリエなのですね。実は秘密の部屋というのもあって、関西学院に当時おられた方が、学生運動をしていて、1年間くらいここへ、わけあって居候させてもらったという話もあります。

図面12番の秘密の回廊。これは今の建築基準法では許されない構造だと思います。平面図はありますが、入口がどこか分からないと述べられていました。

カフェの内壁一面には漆喰が塗ってあり、パボーニ会を戦後立ち上げて会合をされていた会議室もあります。

トイレが、一番奥にあります。これもお聞きしたところによると、トイレに行くときには、カウンターの中をずっと通りぬけて行かなくてはならない。そうすると、そこには非常に面白い芸術作品が並んでいたらしく、何があるのだろうと興味津々で見ながらトイレに行って、帰ってきたという話でした。

毛綱モン太さんは次のように述べています。

“一階の喫茶室など、いかにも画家のアトリエ風にして一面のガラス張、壁天井を覆うレリーフもどきの絵、ギリシャの神あり、風神雷神あり、戯画あり。又天井の照明は羅針盤なり。”

この写真ではよく見えませんが、サタンと書いてあったり、風神雷神のような絵があったり、鳥獣戯画のような絵があったり、ギリシャの絵があったり、非常におもしろい。置かれているテーブルとイスも、全て大石さんのデザインによるものでした。

戦後になって、先ほど申しましたように、パボーニを文化の発信基地として、そこから美しいもの、芸術文化などを広めたいという大石さんの願いがありました。若いときには画家として活躍されましたが、晩年になってむしろそのような活動に力を注がれた、そんな印象があります。

復刊パボーニ誌には当時の大石さんの活動が詳しく書かれています。

“当時、画伯夫妻の営む茶房ラ・パボーニには芸術を愛好する人たちが集まり、土曜日にもなると、喫茶室の隣の集会室（表紙写真）では時間を忘れて自由に放談する光景が見られたそうです。パボーニ倶楽部は会の名称であり、この場所の呼び名でもありました。時代からかけ離れた自由で芸術的な異空間での、そうした集まりが発展して「放談自由の会合の話し合いから良き生活の常識を新たにし、さがし求めんとする人々の集い」としてパボーニ会が発足し、機関紙パボーニが誕生しました。”

これはパボーニ会発足の言葉ですが、こういう会を毎週開催し、多岐に渡る芸術活動がされていました。また大石さんは白樺派に深く感銘されていたようで、パボーニ会で民藝の焼き物の探索もされています。

私が、このパボーニを知ったのは、小説「火垂るの墓」を読んだからなのです。小説「火垂るの墓」、それからアニメになったあの悲しい「火垂るの墓」、そして実際に野坂が体験した満池谷での生活というのは、少しずつ違うのですが、それらを交えてお話しします。

野坂昭如は神戸御影の中郷町に住んでおり、そこで神戸大空襲にあい、焼け出されます。小説ではお母さんは亡くなりますが、実際には大火傷を負って回生病院に入院されていました。そこを満池谷に疎開しながら、通うという生活を始めるわけです。

満池谷に疎開したのは、遠い親戚がそこに住んでおられたからです。

アニメでは2つ洞穴があって、妹を連れてそこへ逃げ込みます。あの山本二三が描いた洞穴は実際にニテコ池にあったもので、この辺りだったと思います。

野坂が実際に妹を連れて七輪を持って親戚の家から横穴壕へ移ったというのは別の場所でした。ここに金庫会社の社長宅があり、この急な斜面のところに防空壕が掘られていたそうです。その時には社長は疎開して、空き家になっており、この斜面の防空壕に逃げ込んだということを自伝のような小説で野坂が書いています。

それから、アニメの最終には「埴生の宿」の曲が流れます。あのヒントになったのは、野坂昭如が大社小学校近くのベアリング会社の社長宅に貰い水に行った時の様子を高畑監督に話したことからです。そのことについては、「わが極楽の碑」に次のように述べています。

“寄寓先もしばしば断水、あたりは日本有数の高級住宅地で、どこにも井戸を持つ、ここへも貰い水。若い女性四、五人が、庭に面した涼しげな夏座敷で、戦争などどこ吹く風、華やかな笑い声を立て、ある時、ピアノ伴奏で「埴生の宿」を合唱していた、この思い出を、アニメーション監督の高畑勲氏に告げ、ラストシーンのヒントになったらしい。”

ただ、アニメで描かれた家のイメージはどう見ても、松下邸だろうと思います。今の写

真、光雲荘ですね。ここにニテコ池があって、苦樂園口の方へ上る坂です。

以前は、この坂道の北側にはアメリカ領事館があったのですが、取り壊されて、マンションが建てられ、ニテコ池の景観も変わりました。

アニメに出てきた急な階段も、小学校からの帰りに上った記憶があり、アニメを見るたびに懐かしく思い出しておりました。

先ほど申しましたように、野坂昭如は満地谷の親戚の家から、回生病院に入院していた母親のもとへ、食べ物を持って通うわけです。実際の妹は、アニメに描かれたほど大きくなくて、1歳4ヶ月だった。神戸女学院の親戚の女性と一緒に病院まで行ったようですが、親戚の家は満地谷のすぐ下のところで、昔はこんな風景でした。田んぼがあって、小川が流れて、野坂が疎開した当時はホテルが舞っていたようですが、私が小学生のときはもう蛭はいなかった。

今でもそうですが、ニテコ池からオーバーフローした水を流している小川がありました。この小川が今どうなっているかという、この写真のようにコンクリートの側溝になっています。ほとんど田んぼは残ってないですね。住宅とマンションになっています。

野坂の書いた「火垂るの墓」これは直木賞を受賞した小説ですが、その中に小松左京が登場するのです。最初読んだ時はわからなかったのですが、野坂と小松の交流があったことを知り、これは小松左京に違いないと思ったのです。

どんな風に描かれているかといいますと。

“一直線に走るアスファルトの、ところどころに馬力がとまっていて、疎開荷物を出している、神戸一中の帽子かぶり眼鏡かけ小肥りの男が、むつかしそうな本を両手いっぱいにかかえて荷台に置き、馬はただものうげに尻尾をはねかしている、右へ曲がると夙川の堤防に出て、その途中に「パボーニ」という店、サッカリンで味をつけた寒天を売っているから買い喰いし、……”

こういう風にてでくるんですね。小松左京さんが、小説に描かれているように中学生の頃から小太りだったかどうか、非常に疑問ですが、これは小松左京さんのイメージですよ。神戸1中でメガネかけて小太りと。そんないたずらを野坂は小説の中でしているのです。アニメ「火垂るの墓」には残念ながら、パボーニも小松左京さんも登場しません。

現在のパボーニの跡地の様子です。高い棕櫚の樹と花壇しゅろが残っており、空き地にパボーニと書いたコンテナが置かれています。昔はこの通りから夙川の教会が見えたということですが、残念ながら、マンションが視界を遮り、今は見えていません。

パボーニを訪れたかどうかわかりませんが、森田たまさんという随筆家がおられました。最初西宮に移って来られたときは、ちょうどパボーニの東側の家を借りて生まれ、その後、もう少し東へ行った一本松のあたりに移られています。この辺りで見えた六甲山の風景や、夙川の風景を「もめん随筆」などで紹介されています。

野坂はパボーニが気に入っていたようで、何度も訪れています。パボーニで野坂に会った方の話を聞くと、野坂は、大層酔っ払って話をされていたそうです。

自分の作品の中に知人を登場させるという作家のいたずらを他の作品でもみつけました。手塚治虫さんの北野町の異人館などが舞台として登場する大作「アドルフに告ぐ」という漫画には、話の流れとは合わないのですけれど、野坂昭如の出征シーンが描かれています。「昭如」は字をわざと「昭之」と変えています、「祝應召 野坂昭之君、万歳！」というシーンが突然出てくるのです。どういう関係かいろいろ想像するのですけれど、たぶん野坂さんは戦後闇市派で、戦争には絶対反対でしたから、もし赤紙がきても、拒否したでしょう。それをおもしろがって漫画の中で野坂を出征させたのではないか、年齢は合わないですけどね。そういう風に勝手な想像をしていますと、非常に楽しい。

小松左京さんは先ほどの野坂昭如の「火垂るの墓」に登場されていますが、逆に、小松左京さんの小説に、野坂昭如が出てくるシーンはありません。しかし、一つ「セキスポ69野坂昭如風に」というパロディ風の小説を書いております。どういう作品かというと、満地谷のニテコ池は今や、浄水池という役割はなくなっていました。そこで埋め立ててしまって、博覧会を開こうというのをちょっとエロチックに、野坂昭如の「なんとか事師たち」という、小説の作風を真似て書いています。小松左京さんも悪戯して遊んでいるんだということが分かりました。

小説家というのは、当然創作がうまくて、自伝というのは、だいたい真実なのですが、自伝的小説となると、真偽のほどはわからないことを断っておきます。

その一つに「ひとでなし」という自伝的小説を野坂昭如さんが書いていて、そこでパポーニが出てきます。

“古本屋が開いていて、古い雑誌を買い、川にかかる橋を渡り、すぐ東への坂道を下がって二百米先に、喫茶店「パポーニ」があった。戦後もしばらく経って訪れ、この店は昭和九年、画家大石輝一が開き、その妻が経営、阪神間で、戦時中閉店しなかった只一軒の店だと知ったのだが、律子が知っていたのだろう、ふらっと入り、人口甘味の寒天と、怪しげな珈琲が出された。カウンターにラッパのついた蓄音機があって、ぼくたちをみると、女主人が時局柄ドイツの曲をかけた、常に客はいない。後年女主人に、ぼくと連れの人に記憶はないかたずねると、いつも彼女を連れてきて、えらいませた学生やと、ご主人と二人話をし、ぼくたちのために、寒天の他、主人が買出しにでかけケーキを作ったという、ケーキの覚えはない。”

ここでは神戸女学院の親戚の女性は律子という名で登場します。

大石邦子さんは、戦争中に野坂と律子がパポーニに来たのは覚えてなかったらしいのですが、彼らが終戦前に訪れたのは間違いないようです。

もう一つ、自伝的エッセーの『わが極楽の碑』に夙川教会の話が出てきます。

“神父の依頼で、教会の見える風景を描いたという画家、同じ構図の、水彩を二枚見せた。パポーニを出れば、同じながめなのだが、まるで印象が違う。「この坂で、私、ローラースケートしててころんだことある」響子がつぶやいた、現実のその坂は、何度も歩いている。絵で思い出したらしい。”

この響子さんが満池谷に住む親戚の女性で、彼女とパボーニへ行ったのです。

この絵、現在の写真とは違いますが、夙川カトリック教会に向かう石畳の坂道です。

パボーニの話から少し外れますが、西宮市民の方がたくさんいらっしゃるので、西宮砲台について野坂昭如の話から借りてお話ししたいと思います。

「わが桎梏の碑」より、響子さんを連れて歩いていたときの話です

“「西宮砲台で知ってる？」「そなん、できたん」てつきり本土決戦の備えかと思うと、「勝海舟が造らはってんて」瀬戸内海、西国街道を攻め上がる薩長連合軍を迎え撃つための、洋風砲台。「試射したらね、煙がこもってしてもて、射手が窒息しかけてんて、それで終わり、アホみたい」響子が笑った。……”

凜太郎さんという方が、西宮砲台の大ファンで、煙がこもった秘密を解明されています。実は間違った使い方をしているのですね。もともと世界中にマーテロータワーと呼ばれる護岸の砲台がありました。アイスランドに、オーストラリアに、アメリカにも、という風に世界中に作られたタワーで、西宮砲台が実は世界で一番最後に作られたマーテロータワーです。勝海舟は、部下に命じてオランダ語訳を見ながら、設計図を書かせ築かせた。そのときに図面には大砲まで描かれてなかったようなので、大砲の設置場所を間違えた。あるいは、勝海舟はわかっていたけれど、結局使われなかったの、それをまねごとで使ってみようとした人が間違えたのか、そこはよくわからないのですが、本来は大砲はタワーの上に設置するものでした。そんな歴史があるということを、凜太郎さんが解説されていましたので、是非紹介しておきたいと思います。

今の西宮砲台の様子をみると、本当に寂しい気がするのですが、こういう歴史を理解して、小学生、中学生に教えれば、幕末の歴史や、何でこんな風にマーテロータワーが誤って使われたかなど、非常に興味を持ってくれると思うんですね。

これと同じ砲台が、和田岬にあります。こちらは三菱重工が管理していて、最近ようやくその復元工事が終わり、内部も見学もできるようになったばかりです。あれに負けられないように、西宮砲台も西宮市民で守っていけたらなと思っています。

野坂さんの話に戻りますが、野坂さんはまだご存命で、奥様はタカラヅカのご出身です。奥様はギャラリーymAを東京で開かれておまして、そこでシャンソンの練習をしたり、画廊をやったり、HPを見ますと、やはり大石さんの作品が出品されています。

6枚くらいでできます。これはギャラリーymAで販売されている大石輝一さんの絵ですね。それから、2、3年前の野坂さんですが、月2回毎日新聞にエッセーを出しておられ、その挿絵を担当しているのが、黒田征太郎さんなんです。

黒田征太郎さんは、ばりばりの大阪弁なので、大阪出身かと思いきや、大阪生まれですが、西宮に移り、何度もパボーニを訪れています。黒田さんのHPからです。

“僕は7歳で安井国民学校に上がったんです。学校に行くとすぐに空襲警報が出て家に帰されるという時代でした。その内に爆撃されて屋根が飛んでしまっている。雨が降って、今まで見たこともない所に池ができるんです。それは爆撃されて開いた穴に水が貯まって

いるんですね。安井小学校が避難所でした。道頓堀川、きれいな夙川と香栢園の美しい浜、爆撃された野原、これが僕らの原風景なんです。”

“酒を飲んでいて少年時代の話になって、野坂さんに「蔦がからまっている変な家がありましたね」と言うと、「あれは有名な喫茶店だよ」と野坂さんに笑われました。「一緒に行こうか」と案内していただきながらその場所の野坂さんのエピソードを紐解いていった。”と書かれていて、野坂さんに紹介されて黒田征太郎もパポーニを訪れている。

小松左京さんの話ですが、グラフ西宮 68 に、「懐かしい夙川」という題で寄稿されています。それから、野坂昭如もグラフ西宮 69 に「満地谷再訪」という文を寄稿されており、小松左京さんは

“野坂昭如も、中学時代神戸で焼け出されてしばらくの間、夙川にいて、最近東京である境界のこと、パポーニという古い喫茶店のことなどを、熱くなって語りあったものである”と述べ、野坂昭如は

“安井小学校で、若松町など西宮で長いこと暮らしたこともある、小松左京と会うとあれこれ語ることもある。”

こういう風にパポーニのことを、小松左京と野坂昭如は語り合っていたようです。

さらに小松左京さんはパポーニについて、大震災 95 という本で取り上げています。阪神淡路大震災には、大層心を痛められたとお聞きしておりますが、その中で、パポーニの話を書かれているのです。

“ラ・パポーニというのは、知る人ぞ知るモダンな喫茶店だった。阪急夙川駅を降り、夙川左岸の土堤をちょっと南下して、東へ下りるだらだら坂を下ってくると、南側に、紫紺の壁に黄色い未来派ふうのローマ字が浮き上がり、エキゾチックな観葉植物が外に並んでいて、一見どこが入り口かわからないようだった。この不思議な喫茶店は、若松町にあった私の家から歩いて十数分のところにあり、戦前、私は父や叔父に連れられて何度か入った。壁いっぱい大石画伯の絵が並べられ、ひげの外国人の肖像や、学校で習うのと全然違うタッチの明るい風景画を、私はきよろきよろ見回した。風変わりに思えたが、よく見ると、その風景は、芦屋や六麓荘からのぞむ山並みであり、シャンソンもかかっていたような気がするが、確かでない。この店で私は初めてカフェ・オ・レというものを飲んだ記憶がある。”

とパポーニを紹介されています。

1995 年の 11 月に大手前女子大学第 3 回阪神間サミット、これを河内厚郎先生が企画され、そこへゲストとして参加された小松左京さんの河内先生についてのお話も、当時の DVD をみると信じられると思います。

“～関西の「新進気鋭」だが、その色白ハンサムな彼が、私達家族の西宮における二度目の住所の今津の生まれで、私の四歳年上の兄の、小学校同級生の子息だと知ると、こんな時代になったものだな、とふと我が身の老いが、実感させられる。”

“この企画を二つ返事で引き受けたのは、もちろんなつかしい夙川がテーマになっている

こともあるが、もう一つは会場で、かつて夙川のユニークな喫茶店「ラ・パボーニ」のオーナー、故大石輝一画伯の展示があるということを知ったからだった。”

阪神間サミットの「夙川ルネッサンス」という催しで、「蘇る大石輝一展」も開催されていました。そこへ、ゲストとして招かれた小松左京さんが、大石輝一展にも顔をだされます。その時の写真、行政さんというパボーニに1年間下宿されていた方が、小松先生を案内されました。

“シンポジウムが始まるまでの短い時間、その展示を見て回りながら、私は何ともいえない気分になった。十歳のころ壁から私を見おろしていたひげの外国人の肖像は、そのままそこにあり、よう、久しぶりだな、元気か？と語りかけてくるようだった。”

“今度の震災で、ラ・パボーニはめっちゃめっちゃになり、九十歳になる未亡人は、故郷の鹿児島に引き取られたが、近隣の主婦や、あちこちのラ・パボーニ・ファンが協力して絵画を救い出し、ばらばらになった淡彩レリーフふうの大きな壁画も、復元してアートセンターに展示してあった。”

この展覧会には非常に興味深い絵が展示されていました。それは、夙川カトリック教会の初代主任司祭のブスケ神父の肖像画で、珍しい変遷をたどっております。ブスケ神父は、夙川カトリック教会の初代主任司祭をされ、その後大阪の教会へ移られています。

その時に太平洋戦争で特高に連行され、拷問の末、結局亡くなってしまいました。

それを大石さんは戦後もしばらく知らなかった。大石さんはブスケ神父に色々お世話になっていて、夙川教会で個展を開かせてもらったこともありました。戦後しばらくしてブスケ神父が亡くなったことを知って泣き崩れたとあります。

その肖像画の裏側にはこう書かれています。

“神父シルベン・ブスケ氏の霊に捧ぐ 昭和元年一月十日の夜 貴君の部屋でペチカを囲んで御約束した神父さんの肖像画が 立派ではありませんが描けました 御笑納下さい 昭和三十六年十二月Xマスの日”

肖像画はしばらく行方不明だったそうですが、新庄さんというご夫妻が保管されていたことがわかり、またこうして展示されるようになったということでした。心のこもった絵だと思います。大石さんは晩年に、三田アートガーデンを作りますが、そこにブスケ神父の立像を造っておられます。

夙川カトリック教会の司祭の写真ですが、この方が、初代主任司祭のブスケ神父ですね。2代目が永田司祭。3代目がメルシェ神父。

メルシェ神父も戦時中、特高に連行され、体の具合が悪くなったそうですが彼はなんとか、生き延びて出てこられました。しかし、出てきても、一切恨み言も言わず、その話はしなかった。遠藤周作の小説に出てくるのが、このメルシェ神父です。

遠藤周作は、こどもの時にメルシェ神父から洗礼を受けたように書いていますが、実は洗礼の記帳を見ると、2代目の永田司祭から洗礼を受けています。その後、遠藤周作は教会で悪戯ばかりするものだから、3代目のメルシェ神父からは何度も厳しく叱責されたそうで

す。

ブスケ神父の墓は、現在は満地谷墓地のキリスト教区にあります。戦後になって別の場所から満地谷墓地に移されたそうです。

オハラさんのクリスマスツリーのことは皆さんよくご存知だと思いますが、戦後夙川へこられて、殺伐とした夙川の風景を見て、みんなの心が和むようと、羽衣橋のところにクリスマスツリーをたてられました。オハラさんがアメリカへ帰っても、「クリスマスツリーをたててね」という事で、お金を送ってこられていたのですが、それをひきついで阪急夙川駅のロータリーのところに、今は夙川自治会の方と、ライオンズクラブの方がクリスマスツリーを立てておられます。オハラ家の子供であった、3歳のケビン・トーマス・オハラくんは日本で事故で亡くなり、彼も夙川カトリック教会の墓地に埋葬されています。

時々満地谷の墓地に行っても気づかなかったのですが、航空写真で見ると、キリスト教区に十字架が見えます。これは白い御影石で作られています。そこに行ってみても、地上では十字架とは気づかないのですが、航空写真で観ると、きれいな十字架に見えるのです。

田辺聖子さんも満地谷墓地のキリスト教区の明るさが好きで、小説に出てきます。二人でここへピクニックに来てお弁当を拵げたということを書かれているのです。

山下清もパポーニに何回か逗留されています。山下清の「日本ぶらりぶらり」という本が出版されていますが、その中でパポーニの思い出話を書いています。ちょっと下品ではありますが、「夙川くそばなし」と題しています。

“神戸の展覧会とき、西宮の大石さんという絵をかく人のうちへとめてもらった。弟と二人で三階の絵をかくへやにねていた。そして夙川の景色をマジックインキでかいたりした。この大石さんとくその話をした。ぼくはくその話や小便のはなしがすきなので、いろいろ大石さんにきいたら面白い話をきかせてくれるのでいつまでも話していた。夕飯をたべてしまってからねるまで、くそばなしばかりしていた。”

“くその話は人前でするものではないときくが、生きていくにいちばん大事な話だからいくら叱られてもやめられないので、ぼくはこれからもするつもりですといったら、それはしかたないが、しないですむときにはしないですませた方がよいといわれて、それもそういうものかと思いました。”

大石さんもたぶん話がうまかったのだらうと思います。山下清に付き合ってくその話を長々としたみたいなのですが、教育面でも、論ずのがうまかったようです。

山下清も何度も訪れている西宮市の市民会館、この建物はもう震災でなくなっていますが、そこで1956年の10月に、「大石輝一収集 複製画、炎の画人ヴァンゴッホ展」という展来会が開催されました。日本のゴッホと呼ばれていた山下清も来場し「日本のゴッホ西宮でゴッホ展を見る」という見出しの新聞記事になっていました。山下清展が開かれた時に、パポーニに泊まっていて、阪神パークのプールで水泳していたという写真も残っております。

大石さんがパラソルを持って後ろに立ち、パボーニのベランダで山下清が絵を描いている写真です。もうひとつの方は夙川の堤のベンチに座って写生をしている姿を撮影しています。山下清の描いた夙川の絵があればいいなと思ったのですが、なかなか見つかりません。甲子園の絵はありました。こちらは先ほどの夙川くそ話に掲載されている絵で、たぶんベランダから描いた絵でしょう。こちらにも新聞に載っていた山下清の絵です。

大石さんが若かりし頃のお話になりますが、吉原治良さんご存知でしょうか、元吉原製油の社長で、関西の抽象画をひっぱっていた方ですが、具体美術協会の会長を務めておられました。大石さんは、艸園会という画会を立ち上げ、そこに若い画家たちが参加していました。艸園会の画帖という、メンバーそれぞれが絵を描いた画集があり、堂島のパボーニで見せていただきました。その画帖にお互いの似顔絵を描いたものがあり、吉原治良さんの似顔絵もあります。

吉原治良さんは神戸新聞に自叙伝を書かれていて、そこで大石さんについて語られています。

“そのころ、北野中学以来の友人吉田博一の紹介で艸園会という絵の会へ入会した、すでに多少名前が出た若い画家たちの集団であった。辻愛造、伊藤慶之助、小西謙三、赤松進（赤松麟作先生の二男）田川勤次、大石輝一など十人ぐらいの顔ぶれである。私は三年ぐらいでやめたが、そのあとでも伊藤継郎、前田藤四郎などの諸君が入ったり、なかなか今から考えるといい会だった。大石輝一は、そのころから美術館を建てるといって西宮の奥の方土地の安いところをさがしていた。近年ゴッホの碑を建てたりいろいろやっているが、四十年経て彼の執念が実ったようなもので全く頭が下がる。”

大石輝一は66歳になってから、三田アートガーデンの建設に情熱をかたむけたのですが、最後にそのお話をして終わりにしたいと思います。

最初紹介しました建築家の毛綱モン太が「奇館異感」と題したエッセイで、三田ガーデンについて述べています。

“大石画伯なる人物、世に迎合することなく、画壇におもねることもなく、古希いくばくか過ぎるに、「アート・ガーデン」なるものを建造せり、画伯建設途上にて冥界の人となりしたため口惜しき事態なり。”

“ゴッホ没したアルルの地に似た兵庫県三田市郊外に、青年のための「アート・ガーデン」の設立決心せり。”

神戸新聞で連載された「ひと萌ゆる」でも、「大石輝一、若者集う美の園夢みて」と題して、次のように紹介されています。

“だれもいないのに、何かの気配がする。それも濃密な。三田市の西部。雑木林に覆われた「アートガーデン」へ足を踏み入れた時、そんな感覚にとらわれた。辺りを見回す。生い茂った草の中に石碑が点在する。高さ四メートルの壁画が立つ。一部は崩れ、苔むしている。聞こえるのは、木立を揺さぶる風の音だけ。なのに、迫ってくるような「存在感」は何なのか。「夢を果たせなかった男の執念」地元の人はこう表現した。

男とは大石輝一。”

大石さんはアートガーデンに念願の複製美術館を作ろうとしたのですが、実現せずに亡くなりました。私は2年前に訪ねましたが、福祉施設の方がこの土地を引き受けられ、掃除だけはキレイにゆきとどいておりました。アートガーデンにはブスケ神父の立像がありました。こちらの写真はロマンローランを尊敬していた大石氏が、生誕100年の時に作られた像です。

民芸にも傾倒されたようで、柳宗悦先生賛碑という石碑を作っています。

それぞれの碑を公開するときは、有名人をたくさん三田アートガーデンに呼び、セレモニーを開きました。その写真を見るとなんと大掛かりなのです。アポロの月面着陸に感動した大石さんは、その碑を造っています。そしてアポロの船長に手紙を書き、その返事まで貰っているのです。アポロの月面着陸の碑を公開するときには、アメリカ領事も呼んで大セレモニーでした。これが今どうなっているかという、悲しいことに表面はほとんど崩れ落ちて、月面の足跡だけが残り、星条旗も何もなくなっているという状態です。

この写真は阪神淡路大震災で、夙川のパボーニが倒壊し、地元の方々が中心となって、パボーニから絵を運び出している様子です。

安田泰幸さんという画家が、「神戸・街ものがたり」という本を出版されているのですが、堂島のパボーニでも個展を開かれたことがあり、ホームページを見ていますと、こんな風にパボーニを紹介しています。

“阪神間モダニズムの文化が華やかだったころ、活躍した画家に大石輝一という人がいる。この人が西宮の夙川で「パボーニ」という喫茶店をやっていた。自ら店を設計し、店内には壁一面に絵を描いた。さまざま文化人が集う店だったが、画家が亡くなって久しく、阪神大震災で店も壊れてしまった。大石輝一と血縁のあるオーナーが現在大阪堂島に同名の「パボーニ」という店をやっておられて、ここにも当代の文化人やアーティストが集まっている。”

梅田から堂島の方へ歩いて行くと堂島アバンザというビルがありますが、その東側に「カーサ・ラ・パボーニ」があります。オーナーの福井ひでのさんに今日ご紹介した多くの資料を提供いただき、このようなお話ができましたことを感謝をしています。今日は長い間、拙い話でしたが、ご清聴いただきありがとうございました。